

# 陸羯南聞書

はじめに

一昨年本誌第七、八の両号に「陸羯南の条約改正論」という小論を發表したが、その後、須藤正徳氏の御好意により、主として弘前・青森近辺のではあるが羯南に血縁のある人達に接し、又親しくその土地を訪れる機会を得た。

実は前回の「陸羯南の条約改正論」というのが全く機械的に彼の国策論等の外交論を分解、操作したにすぎないといわれ、明治二十年代の歴史的、社会的、特殊条件と彼の思想との結びつき、その基盤の上での生成、変貌、転回等の考察が足りず、極めて底の浅いものであるという批判をうけ、自らもそれを認め、羯南に対する全体的考察を再び、新たなる視角からし直すなければならぬと思ひ

ているのだが、今回京都へ行くことになり、この意を果すことが出来なかつた。従つて極めて下本意ではあるが、締切日も迫っているし、今回は今度の調査で得た貴重な聞き書きを草稿のまゝで發表することにする。

なお今回の發表の真意は一つにはこれがいさゝかりなりとも羯南研究の礎石の一端となることを願つてゐるがあるが、更に本稿を素材にして、埋れている羯南の郷里における姿を少しでも明らかにし得ればという気持ちからでもある。従つて小論の誤りは遠慮なく叱正して頂きたい。

稲葉 克 夫

## (一) 羯南研究上の問題点

最近特に日本史学界では思想史、文化史関係の

体系的な研究が特記されるが、反面個別的研究所の一層の深化が要請されているのが注目される。明治史を中心とする近代思想史の研究は最も華やかである反面特にこの感を深くする。羯南も明治の政論家・思想家としては、同時代の蘇峰、雪嶺などに比して地味ながらも戦後は新しい時代のフットライトを浴びて、より大きなウェイトをかけられ、学問上の立場から、より牛堅く取り上げられてきた。

その原因は何よりも終戦後の主体性を失ったかにかゝる日本において、やゝ類似の体験をかいくぐって興隆した明治の人々が如何なる態度でそれに対処したかが問題化されたことである。又シュトルム・ウント・ドランクの明治に生き、時代を指導し、その人物、識見にいかにも理想的な東洋の大人物の面影を蔵していた羯南に人々が魅されたということにもあるであろう。更に羯南等の初期ナショナリズムの其後の発展が日本帝国主義・成長の前払いをなし、今次の敗戦まで色々といふような形に変容され乍ら続いて来たことへの学問

的究明の立場からでもある。

しかし今回の小論は前にものべた如く、彼の言動を分析、綜合して明治史上に位置づけようとするものではない。それは最近の羯南研究においてやゝウィーク・ポイントとみられているその思想形成期の研究の一助たりうるかも知れない素朴な資料を提供することである。

戦後羯南を論文のテーマに取り上げたのは丸山眞男教授の「陸羯南と国民主義」を始のとし、田畑忍教授の「陸羯南の政治思想」、大久保利謙教授の「陸羯南・三宅雪嶺・徳富蘇峰」、陸羯南の帝国主義」、本山幸彦助教授の「明治二十年代の政論に現われたナショナリズム―陸羯南、三宅雪嶺、志賀重昂の場合」等であるが、その他戦後の各種辞典、概説書、諸講座、人物史、文献解題等は必ずその思想や著書が紹介されている。

しかし乍ら私がいつも物足りなく感じてゐるのは、その何れもが羯南の女婿鈴木虎雄氏が編輯した『羯南文録』か、後年原敬の知遇を得て弘前から政友会を代表して代議士選にも出た梶井盛綱の

『羯南文集』その他、羯南が政論家として完成されてからの資料に據るばかりであり、羯南の思想形成についても文録中の年譜を借用し、官途についてからの交友関係を通して類推するのみであり、甚だ单薄であつた。戦時中に出版された羯南についての一巻の書である川辺真蔵氏の『蘇峰と羯南』に比ぶ、また余りに独断的な羯南観ではあつたが吉田義次氏の『国士陸羯南に比ぶ、同工異曲であつた。

現在羯南の人物を知る上には、いゝまでもなく葉山や、芦屋、大阪におられる遺族の方々の思ひ出や、彼の追悼号である『日本及日本人』(四百六十号)『明治四十年九月十五日発行、政教社』(註三)や雑誌『大日』(二百六号)『昭和十四年九月一日、大日报社』などに発表されている文を通してうかがうほかないわけであるが文献の資料は何れも東京での羯南しか語っていない。私的な面での彼についてはその妻陸子や子や佐藤紅緑がそれらの機会に語っている。なお私前における彼については後述べるように彼の本家に当る中田のり代が最

も精しい。

(註一)

なおみに前記の誌上に筆をのけている人物名を、羯南を知るよりがともなるかと思ひ書き留めておく。

『日本及日本人』関係

杉浦重剛、朝日泰知、内藤晴堂、国府厚東、友部伸吉、国友重章、池辺吉田節、池辺義象、島井崇川、中村不折、桜田大我、井上竜六、八木憲三郎、長谷川万次郎、十葉龍雄、相川勝蔵、斎藤謙堂、安藤鉄腸、志沢光郎、野津嘲水、露月生、田中慶太郎、奥義制、福田静処、鈴木虎雄、猪俣史山、小村挺治、丸山幹治、日笠芳太郎、長谷川竹南、古島一雄

大阪追悼会出席者

福井彦次郎、金井重吉、川田滝二郎、宝来市松、対馬健之助、浜田建次郎、守孫五郎、安川立次郎、上野理一、桜田文吉、藤田静処、竹下啓三、江崎叔一、仙田重邦、木村匡三、廣瀬、藤波正直、野添宗三、杉井一久、町田

忠治 西村時彦 島井赫雄 後醍醐正六 青  
藤信 安藤正純 辰井植吉

蜀南七回期出席者一谷中全生庵

新聞記事の写し、出席者名は著名人物  
のみなる由、大隈伯、三浦子、一戸中将、寺  
尾亨、頭山滿、杉浦重剛、加藤恒忠、箕浦勝  
人、花井卓蔵、的野半助、小川平吉、伊東知  
也、鈴木万次郎、国府青彦、中橋伝五郎、福  
本日南、中村不折、朝日系知衆、池辺義象、  
内藤鳴雪、小野鷲堂、河村善益、中原邦平、  
後藤男、三宅雪嶺、菊地武徳、増田義一、古  
島一雄 等百数十名

才十三回忌追悼会出席者 於湯島麟祥院

日本青年会發起 改教社同人参加

九月二十一日

永原鉦作 梶井盛 宮本伸 五百木良三 館  
森万平 桂五十郎 中島気峠 宮島代 須藤  
正寛 佐野島之助 佐々木正綱 吉莊毅 中  
山安太 藤本尚則 中村純九郎 須崎芳三郎  
藤根常吉 内藤素行 三浦勝太郎 坂井久良

岐 杉浦重剛 高沢清 龍秀 飯村辰之助  
中村弥六 井上龜六 牧野謙次郎 八太徳三  
郎 古橋金四郎 桂野博愛 桑原重矩 長屋  
信吉 寒川陽光 須田静海 荒木恒造 森田  
義郎 小谷保太郎 吉川悦次 広月凌 長尾  
折三 松澤賢定 吉田正松 岩川友太郎 佐  
々木達三 国府種徳 志賀重昂 福永誠 辰  
巳小次郎 深田鶴松 中村不折 小沢忠 矢  
崎豊太郎 稲葉岩吉 三苗玄吉 東海勇蔵  
横矢重道 早乙女勇五郎 中野正剛代理 天  
旭古鑑 三田村玄竜 佐々木和策 阪東宣雄  
河東兼五郎 今居三吉 伊藤知也 古島一雄  
三浦梧棲 池田良榮 高橋一郎 神鞭常考  
安藤正純 結城琢 丸山幹治 黒沢祐太郎  
中野勇平 国分高胤 藤井公平 小野駒之助  
狩好塾 一 国松文雄 寺村和一 岡村昇太郎  
北村猛徳

前述した如く従来蜀南がどのような素地の上に  
自由主義的であり、しかも国民主義、日本主義を

拒くようになつたかは單なる類推以上には不明であつた。その國民主義、日本主義がドイツ流の國權主義でないことはつとに田畑教授の強調してゐるところであり、儒教、特に陽明學派の影響、決定的にはその性格に思想形成の根柢をみており、本山論文でも羯南の思想の基盤を儒教的、士道的啟蒙とその思想より演譯して結論を求めている。従つて未だに羯南の思想形成而定の裏づけが漏れてゐないのであり、今回、須藤氏の手引きにより色々具体的に手掛りとなる資料を得たので、これが今後の羯南研究の一礎石にもなるうかと思ひ、この草稿を公けにするわけである。

なお今回の稿をまこめるに直接御啟導下さつた須藤正憲氏は羯南の父、後次郎の孫に當り、長く陸家に寄留し、現在弘前大学に勤務しておられる。更に羯南の本家に當る中田のり氏、羯南の弟童助の二男大山勇氏、その他嶋海官蔵、斎藤周蔵、佐々木寅二郎、佐々木儀兵衛、鉄男の諸氏に色々御意見や資料を提示してもらつたことに、この誌上より厚く感謝の意を表さして頂きたい。

## (二) 羯南の名分論の素地について

羯南が国内政治を評する場合、又外交問題を取上げ上げる際も常に名分を正したのは周知の事実であり、名分論は羯南の思想の中核であるともいえる。

この度須藤氏同道の下に中田のりさんを訪ねて話しあつた幼少年年期の羯南の境遇の素描をのべて、その名分論が形成される一つの素因を掘り出して見よう。

羯南の生家の中田氏は津輕藩の三十石取りであり、所謂下級武士階層に属してゐたわけである。しかし羯南年譜で見るように父謙吉は藩主の近侍、茶道役、御坊主頭であり、更に本家の中田家も三百石の御用人であり、庶民は勿論、武士階級のうろでも藩主と人間的に融れあう機會の特に多かつた家柄であつた。廃藩置縣後、羯南等が住んでゐた土地は弘前で通称九十九森と呼ばれてゐる風光明媚の地であるが、此処は藩主の鷹狩り場であり、後には別邸が建てられていた。その隣接地を払い下けてもらつたのである。従つて藩主の存在

などに対してもより強い親愛感を持て得たのではあるまいか。後年津輕家の嗣子をベルリンに迎へに行つて来て、向もなく病み、遂に立たなかつたのであるが、羯南の名分論や君主権論、君臣觀などの基底には自己の生活体験が濃い血となつて流れていたのであるまいか。伊藤博文と知りあひが恵かつた原因に伊藤が天皇、皇后を呼び捨てにした言葉づかいにあつたといわれるエピソードもそれ自身の真意はここにあるにしてもやはり羯南の感情、倫理感覺を物語るものだろう。

又幼少の頃羯南は士族解体時代の苦しい家計を多く助けたといわれるが、その位しい合同／＼を共に最も愛読したのは山鹿素行の『山鹿語録』四十五巻といわれている。素行はいうまでもなく、『中朝事實』等において強烈な日本主義を唱へ武士道の大成者でもあつた。素行の思想、言行は当然少年羯南の柔かい頭脳によつて吸収され肉体化されて行つたことだろう。このことから彼の日本主義の源流が伺われるのではないだろうか。更に羯南の崇拜してゐた山岡鉄舟を考へてみる場合、

やはり二人に相通するものが感じられるわけである。

以上私は極めて少量の、しかも限られた範圍の資料からではあるが、羯南の倫理感覺、君主論、日本主義、名分論のよりこくる点の才一は彼の幼少年期、弘前在住時代に萌芽的ではあるが、既に形成されてゐたとみるわけである。

なお陸家の私事にわたることだろうが、羯南がどういふ理由で全く縁もゆかりもないといわれる東京の絶家——その家柄などについては不明——の「陸」家を継いだかのいわれを考へることも必要と思ふので言反する。

大山勇氏は精しいことは不明だが当時戸主になれは徴兵免除になるからだろうと云つてゐた。中田のり代は又別の説明をされた。中田謙有は佐々木家から中田家へ養子に行つたのであるが、謙有が中田家の養子と決定した後に中田家に男子が生まれた。しかし養父は家督を謙有に継がせ、その男子は戸籍上謙有の長男としたのである。即ち後次郎である。弘前の中田家の菩提寺月峰院の過去

帳によると天保五年（一八三四）の生れとなっている。

以下の事は同峰陸過去帖の控えを紛失したので記憶によつて記す。この出生は確か謙吉が十七、八才の頃だつたと思ふ。羯南の生れたのはそれより二十三年後の安政四年（一八五七）十月四日である。実質的に長男だから巳年生れの巳之太郎と名付けたという。羯南の妻陸三の子が「日本及日本人」に書いた文章をみると、羯南は幼少の頃母を失つたようである。普通羯南の弟といわれる大山竜助氏は甥氏自明も異母弟だといつていた。羯南とは六十歳違いの昭和十一年頃亡くなつてゐる。羯南の弟妹はこの世にもあり、その弟妹といわれる人が今年の初めに亡くなつたことも知つた。弘前市役所に現存してゐる戸籍面では謙吉妻「いよ」は市内田代町黒石茂次郎吾々となつてゐる。従つて年譜に出てゐる「種市女ほ」という人については今少し詳しく詮索してみることがあると思つてゐる。なお過去帳、戸籍の写しは何れも須藤氏の好意によつてみせて頂いたものである。

このように複雑な家庭なので羯南は相続の煩を避け、すつきりと俊次郎氏に家督を継がせるために東京の、全く縁もゆかりもない、未知の「陸」家を継いで戸主になつたのだと中田氏は説明してゐる。ここにも羯南の名を重んずる気持ちの一端がくみとれるのではあるまいか。

### 三 世界南勢への南眼の蒙地

弘前市の鴨海東仲氏等が中心になり、郷土史家竹内運平氏口述、相木司良軍の『佐々木玄俊伝』の一節に羯南と玄俊の關係が出てゐる。佐々木玄俊はいうまでもなく津軽蘭学の創始者であり、江戸で杉田成卿の才一の高弟であり、クラメルの辞典『番語彙編』と題して録刻し（安政四、一八五七）津軽で最初に種痘を行い（但し、このことには多少疑問がある）、洋館を建て、佐々木象山や明大社の神田孝平、朝野新南の柳川春三、更には勝海舟と親交のあつた碩学である。玄俊は羯南の父謙吉と従兄弟の關係にある。九十才森の玄俊郎と羯南の家とは垣一つで隔てられていたが、

小徑があつて十と、凡才頃迄羯南はよく玄俊邸へ遊びに行き、玄俊も又羯南の天稟の才をよく見抜いてか、ッミノコ・ミノコ。と可愛いがつていたといわれる。この偉大な洋学者に接して少年已之太郎の胸に大きな抱負が持たれなかつた筈はなからう。

しかも羯南が学んだ東奥義塾は、前身は津輕藩の藩校「稽古館」であるが、既に安政六年、佐々木玄俊によつて蘭学堂が附かれ、更に明治二年英学塾も興り、東北で最も早く外人教師を招聘した学校であり、自由民権運動の據点でもあつた。

彼は東北の僻隅の地において十八才まで生長したのであるが、既に明治四年十五才の年に「風涛自嶽羯南来」と漢学塾に於いてその意識の一端をのぞかゞとおり、人生の最も重要な時期に英学、蘭学という新しい時代の恵風に接してしたのである。明治七年仙台師範学校に入學したが、明治開化期、啓蒙主義華やかなりし頃の大都會生活であり、彼の思想はこゝら辺りで大きく組織立てられたものではあるまいか。司法省法学校生活四年において

は、この点は更に磨きをかけられたのであろう。この向函館で仏人に仏語を學んだともいわれる。ともあれ明治の最も開明的な時期に学校で學び得たというのは彼にどの程非常に幸いであつたろうし、愈々士族の流に「幼而読書學道。及壯則出作四方汗漫之遊。覲奇交賢。以磨其知識。是男子之事也。故漢士古俗。有蓬桑之礼焉。余歲甫十有八。志氣方壯。稍厭荷鋤採薪之陋。四方之志。勃焉不可抑。の氣概を与之たのは直接に學問の教授はしなかつたにせよ佐々木玄俊の影響が陰に陽に作用しているところからは敢て奇矯の說ではあるまい。

#### (四) 自由主義の素地

明治十二年四月、原敬等と司法省法学校を中退した羯南は、その後一年余郷里の青森新聞社に勤めていた。その時の心情は彼の漢詩集「寒帆餘影」序に出ている。上京、七年の成果を「皆黄梁一夢而已」と悲観しているが、しかしその反面「二月山中人不同、東風一樹臥龍梅」という心境を中に潜めてもいたのである。



いうまでもなく当時国内には国会開設、憲法制定という立憲政治を要求する声が満ちていた。元老院へは「明治十三年建白一覽」によると北海道の膽振国から鹿児島県にわたる地域から五十五種の建白書が提出されていた。青森県からは本田庸一、中市稲太郎を中心とした自由民権派が「陸奥八郡の有志三十人の同志」を得、十三年三月二十日に建白書を提出している。羯南はその際の建白書作成委員の一人であった。この時の建白文は危機意識が強く、国権論的なものであり、決して一律に云々クラテックなものとはみられないが青年羯南がこのような時代の風潮に深く接したことは大きな意味を持っただろう。しかし彼の大望はそれに経済上の原因からも彼を長くは此の地に留めなかった。

この自由民権運動の指導者であり、後年は日本のキリスト教界の指導者となった本多庸一は彼の親類であり、羯南はよく本多の説教果や書物を借りて読んだといわれる。弘前市の伊藤重代への手紙にも「山形、本多之諸氏この幼年の交は余りに

遠き昔事御座候へ」(明治二十四年三月四日)と書いている。本多は羯南より十才位年長で戊辰戦争の時に奥羽列藩の同盟に奔走していた重要人物でもあり、後に脱藩して横浜へ行ったりした。

以上のように羯南がヨーロッパ文明、欧米事情に深い理解を待つにいたる基盤には、早くから蘭学、英学の恩吹きに接したこと、更には自由民権運動への参加という経歴が重要であると考えられるが、此處でなお考えなければならぬことは司法省法学校に学んだことである。当時、近代法の規範とされているのは有名なナポレオン法典であり、日本政府の法律顧問はポアソナードであり、羯南は後年フランス大使に凝じられる程にフランス語に熟達したのだった。それを彼の自由主義への理解はこの生活を通して得られたとは思われないであろうか。彼が政論、国際論を立論する時の該博な学殖の基礎はこの時代に獲得されたものである。彼がこの時代にフランスの啓蒙主義者達の思想を学んだらしい証拠は次の話によっても何われるのである。「日本及日本人」四百六十と

号に掲載された国友重章の吁陸羯南という文に、明治十四・五年頃の羯南をのべ、余が最初に羯南の学識を認めしは王権論という漢文の論説なりき。其文は君が仏学の学識をば漢文もて論述せしものにて冒頭に、王道有三権。という句を以て書起し、迨々数万言立法行政司法三権の鼎立を説き之を統ふるに最上権を以てすべしといふを以て結べるものなりしとある。恐らくモンテスキューの「法の精神」を彼なりに組み変えたものらしいが、後の古典的名著「近時憲法考」などの草案でもあろう。又佐藤紅緑によると國際論を書く時にもフランス語の本を夢中で調べていたというし、ルロアボリューの「今世國家論」という本をさかんに紅緑に読むようにすすめたという。

とに角羯南の進歩的な面を考察する場合にこの法学時代を忘れてならないと思う。

## 五 羯南寸橋

終りにこれまでの色々な機会に捉えた羯南のイメーヂを文章に組み立て、みてこの「簡書」を閉

じたいと思う。

何よりも士道、士魂をオーに重んじ、その社屋は英雄、豪傑の屯する梁山泊の觀があつたといわれるが、東洋風の、ある意味では長者の風格を備えた大人物であるらしい。しかし早くから色々権威に対して反逆し、生活上の辛酸をなめ、政治運動にも参加し、官界に入つては大隱重信退放などの陰謀を実際に見たりして世の中の表裏を知つていたので、彼自身も権謀術策においても人後に落ちなかつたといわれている。

彼が官界を中途で飛び出して言論活動に一生を捧げたのは上長であつた青木貞三、高橋謙三の影響や薩長閥や政商に迎合し得ない剛毅の性格にもよるだろうが、多分に芸術家的血を引いていることも見逃せない。

彼の父は茶通を以て藩主に仕え、母方からも豪千家の奥義書が出されていた。更に弟龍助は彫刻に非凡の腕を有つており、その子の大山勇氏も芸術品に高い理解を示され、羯南の子女には荒木十畝に師事して帝展に入選した人もあつた。彼自身

のすぐれた創作活動はいうまでもなく、漢詩に、短歌に、そして新聞『日本』の論説には至芸の妙を發揮していた。しかし何より功績は正阿予規や中村不折などの偉大な藝術家を育てあげたことであろう。彼の内より出て後半ジャーナリズムの世界の指導的地位で活躍しているものは十指に余る程である。「孤高天下を睥睨し、敢て權勢家や大衆に迎合することぞ欲しなかつた。彼は祠堂に余り知りられず、一部に傲慢という悪評さがある」といふが、藤村の記事などをみれば如何に祠堂の後輩の面倒をみたかかわかる。写真でみると余り大抵とは思えないが、相模は鋭敏として迎ひを拂うものがあつた。その眼力の鋭しさは相手の心意を射通す感があり、一面清廉の風格をおのずと顯現している。

福南の父は明治二十七年七十余才で没しているが、慶應義塾卒業後、色々な事業をやつたらしい。国家に筆畑を経営したり、本車により精米を行つたり、養蚕を行つたりしたといふ。彼は山へ桑をのびに多くつたといふ。しかし何れも余り成功しなかつたらしい。

のたらしい。幼少の頃の福南はつづさに没落士族の苦しみを味つたのである。それ文に政治のあり方というものに批判の目を向けることが早くからあつただろう。福南の生家は元年、北澤輕郎の小阿弥村へ持ち去られたがその屋敷跡は今も本車（カネクルマ）と呼はれている。

福南は金錢に關しては恬淡としていたらしい。だが彼の士道の考へ方は資本主義社会では仲々成立するに困難に思われる。しかし國際論の際などには經濟政策、特に保護貿易について極めて積極的に目論を主張しているが之等の基盤には幼少期以來更には北海道などでも体験した弱小企業の成立の難しさの實感が大きく物をいつてゐるのである。

## 結 び

以上私はまだ充分に推敲も加へず、極めて素朴に福南の幼少期について色々と聞き書きを書き連ねたが、初めにも云つたようにこの拙文が契機になつて郷土における未知の福南研究史料―手紙、

羯南についての言い伝え、著書、その他羯南の字  
が出てゐる何物でも良い——が公南されれば私の  
目的は大方達せられるのである。そしてこの偉大  
な人物の姿が更に具體的に浮き彫りにされて半世  
紀後の我々に何かを物語つてくれることを願うも  
のである。

なお本論は簡き書きではあるけれども私の考え  
が混合されたり、南き違い、思い違いも多いこと  
と思ひますので間違つてゐる点は叱正して下さい  
ことを重ねて願ひます。

今回上巻を目前に控えてのまどめなのと尚一層  
念を押し、確かめたいことも幾のまっにならなかつ  
たので後日を期した次第です。

(一九五九、四、八記)